小倉百人一首かるたを活用した国際交流プログラム及び日本文化学習教材の開発

国語科　奥村準子

海外の若者たちへ向けた日本の伝統文化紹介を通し、日本の高校生の「伝え合う力」伸長をめざした相互交流プログラムを下記(1)～(3)で実施し、一定の成果を得た。

(1)ニーズの明確化（調査活動）

(2)「競技かるたハンドブック」の翻訳（英・中・タイ）

(3)(2)を活用した国際交流プログラムの構築・実施

キーワード：小倉百人一首かるた・国際交流プログラム・日本文化学習教材

1．研究目的

本校は筑波大学の「グローバル30（国際化拠点整備事業）」の採択を受け、国際教育推進に力点を置いている。2007年に台湾・淡水商工高校と相互交流を実施、68名の修学旅行団の受け入れをおこなった。2009年にはタイ・バンコクのワタナー・ウィタヤー・アカデミーの短期語学留学生６名を受け入れ、３週間にわたる交流プログラムを実施した。グローバリゼーションの発展とともに、多文化共生を促進する国際交流プログラムのニーズはますます高まるものと考えられる。高等学校においては、高校生相互の国際交流支援にむけ、日本の高校生自身が自国の文化を理解し他者に伝えることを目指す学習プログラムの構築が急務と考える。

また、2009年３月には高等学校学習指導要領が告示され、国語科の各科目内容に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新たに加わり、古典離れや古典軽視がすすむ現代日本社会において「古典に親しむ態度」を「生涯にわたって」育むことが新たな目標におかれている。すなわち、生徒に古典を学ぶ楽しさを体感させ、生涯学習へ転換する契機を提供することが、高等学校国語科の授業に求められている。

さらに最近、中国・韓国・タイなどアジア諸国における日本語学習者の学習材として小倉百人一首かるたが有効であり、その要請の高まりを実感している。競技かるたの持つゲーム性はもちろん、伝統文化の側面（和歌の様式美と日本人の精神性、工芸的な美しさや和装のもつ民族性など）や日本語教育テキストとしての有用性（取り札はすべて「ひらがな」表記）が評価されている。日本のサブカルチャー受容が急速に広まる海外の若者たちへ、様々な言語活動による日本の伝統文化紹介を通し、日本の高校生の「伝え合う力」を伸ばしつつ若者相互が交流する機会を計画したいと考え、交流プログラムを実施した。本稿では平成22年度に実施した２つの交流プログラムについて報告する。

2．研究方法

（1）ニーズの明確化（調査活動）

日本語を学習する外国人学生、日本語教師等を対象に、「小倉百人一首かるた」への興味関心、学習のニーズなどについて中国（北京）、韓国（ソウル）、と埼玉の日本語学校で質問紙調査を実施した。

①中国・北京での調査

中国・北京で日本語を学習する大学生を対象に、「小倉百人一首かるた」への興味関心が特にどの点にあるか、学習のニーズがどこにあるか、等について質問紙による調査を実施した。現地におけるコーディネートは、北京を拠点に競技かるたの普及活動に携わるストーン睦美氏（東京東会所属・６段）に依頼した。同氏は2010年５月15日に国際交流基金北京日本文化センターにて「第３回小倉百人一首かるた北京大会」（中国人参加者49人、日本人参加者23人）を主催した。同大会には昨年に続き北京工業大学・北京科技大学の日本語学科の学生らが参加したので、この機を捉えて日本語を学ぶ学生の「競技かるた」に対するイメージ、日本文化に対する興味の観点、などについて質問紙調査を実施した。また、筆者も大会において和装による競技かるた模範試合、読唱などを披露し、和装の魅力や所作・マナーなどについて説明した。調査結果の概要は以下のとおりである。

【第３回小倉百人一首 KARUTA 北京大会　質問紙調査（中国人学生対象、（　）は人数】

回収数：40（参加者49）、年性構成：10代（7）、20代（33）、性別：男（3）、女（36）、未記入（1）

1．大会参加の動機（複数回答可）

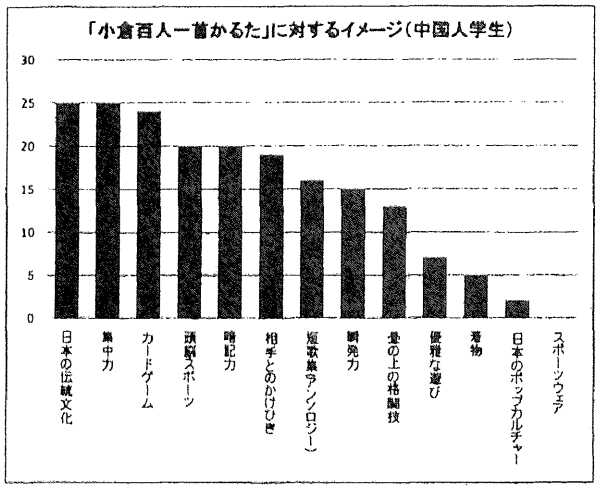
①知人の紹介（27）

②会場（北京日本文化センター）のwebページを見た（8）

③大学の授業で勧められた（8）

2．「小倉百人一首かるた」に対するイメージ

〔表１　「小倉百人一首かるた」に対する中国人学生のイメージ（複数回答可）〕



3．かるたを経験してどんな点が日本的と感じたか

①和歌・詩歌(9)

②読み方・読唱(6)

③畳(5)

④遊び方とルール・マナー・挨拶(4)

⑤札（取り札・読み札）(4)

⑥読み手(2)

⑦短歌集(2)

⑧百人一首(1)

4．日本語を学習するうえで、かるたはどんな点が役に立つか

①古典文学や伝統文化（和歌）の魅力を理解(13)

②暗記に役立つ(6)

③日本語に対する情熱・興味を促す(5)

④ヒアリング・リスニング(3)

⑤話し言葉・朗読・和歌の読み方(3)

⑥あまり役に立たなかった(1)

⑦日本人の緻密な考え方を感じた(1)

⑧百人一首を知った(1)

5．大会に参加した感想

①面白かった・楽しかった・嬉しかった(17)

②日本文化の魅力を感じた・理解を深めた(5)

③有意義だった・勉強になった(5)

④たくさんの友達（他校の学生）に出会った(3)

⑤その他（集中力を鍛えた・緊張感を味わった・私には大変だった・また参加したい・たくさんの日本人も一緒に参加できて嬉しかった・専門的で活力がある・勝って嬉しかった　等）

〔写真１　北京大会風景（手前の畳の上で日本人の小学生が競技かるたを、奥の会議机で中国人学生が源平戦を経験している。〕

②日本（埼玉）での調査

2010年7月14日に、顧問を務める本校かるた部の生徒保護者が勤務されている縁で、武蔵浦和日本語学院（中国人学生を主対象とした日本語学校）を訪問させていただき、学生を対象に競技かるたの認知度や日本文化に対する興味関心について質問紙調査をおこなった。

【武蔵浦和日本語学院　質問紙調査（学生）】

回収数42、年齢構成：20代(35)、30代(1)、40代以上(1)

性別：男(23)、女(18)

国籍：中国(34)、香港(3)、韓国(1)、モンゴル(1)、未記入(3)

滞在期間：１年未満(11)、１～２年(26)、２年以上(3)、未記入(2)

希望進路：専門学校(6)、大学(21)、大学院(8)、就職(１)、未記入他(6)

「かるた」の認知度：知っている(19)、知らない(21)

「小倉百人一首かるた」の認知度：知っている(5)、知らない(35)

「小倉百人一首かるた」の経験：ある(2)、ない(27)

「着物」への興味：ある(28)、ない(10)

日本の「漫画」について：読む(27)、読まない(11)

魅力を感じる日本文化：着物7、祭り5、漫画・美容・桜　各3、和菓子・剣道・ファッション・茶道　各2、メイク・アイドル・経済・書道・若者文化・ゲーム・三味線・舞台・演歌・和歌・歌舞伎・花火大会・礼儀・思いやり・丁寧　各1）

両調査を比較してみると、対象は同じ日本語を学ぶ20代の中国人学生であるが、小倉百人一首かるたに対する理解度には大きな隔たりがあることが明らかになった。北京大会に参加した学生のほとんどは日本語学部の学生であり、おそらく事前に授業などで競技かるたを体験していることもあって、小倉百人一首かるたに対する理解は深いことが調査から伺える。一方、日本語学校の学生が希望する進路は社会科学や理工・情報系など多岐にわたっているため、必ずしも日本の伝統文化に対して強い興味関心があるわけではない。今後、小倉百人一首かるたを活用した国際交流プログラム構築にあたり、交流相手の日本語能力や伝統文化学習に対するレディネスについて事前の把握が重要であることが確認できた。

③韓国・ソウルでの調査

2010年8月3日、国際交流基金ソウル日本文化センター主催による日本語教師のための集中研修において、競技かるた体験がおこなわれた。これはソウル在住の韓国人で中学・高等学校で日本語を教える教師を対象にした１週間の集中研修で年２回開催している。講師として招かれた小林好真（東京大学かるた会所属・４段）・久保久美子（競技かるた永世クイーン）両氏にお願いし、翻訳を計画している「競技かるたハンドブック」（埼玉県かるた協会2009年発行、詳細は後述）を受講者へ配布し、中高生を対象とした日本語教育現場での活用の可能性について質問紙調査を実施した。

【国際交流基金ソウル日本文化センター　質問紙調査（韓国人日本語教師対象）】

回収数18（参加者43名）、年齢構成：20代(1)、30代(11)、40代（6）

性別：男(1)、女(8)、未記入（9）

日本語教師経験：1年7ヶ月～20年5ヶ月
（平均約8年）

かるた遊びの経験：ある(3)、ない（15）

かるたを使った授業の経験：ある(6)、ない(12)

「ある」と回答した授業の具体例：ひらがなかるたを使ったゲーム(5)、pptで紹介するだけ(1)

「競技かるたハンドブック」について特に分かりづらい項目：①競技かるた用語集、②「お手つき」のルール

日本語教師の先生方は、自身でかるた遊びの経験があると回答した方はわずか３人だったが、授業のなかで「ひらがなかるた」を活用したとの回答が６人だったことから、授業でひらがな学習定着のために「かるた」というツールが活用可能であることが確認できた。一方、競技かるたというレベルになると、専門用語やお手つきといったルールの理解は教師であっても簡単ではないことが伺えた。

（２）「小倉百人一首かるた」に関わる紹介テキスト作成・翻訳

2009 年に文化庁「地域芸術振興プラン推進事業」の支援を受け、筆者が理事を務める埼玉県かるた協会で編集・発行した「競技かるたハンドブック」を、海外で活躍する競技かるた選手らの協力を得て中国語・英語・タイ語に翻訳、webに掲載し、日本文化学習教材の提供をおこなった。（http://karuta.game.coocan.jp:80/）

同ハンドブックは下記項目から構成されており、発行にあたっては、筑波大学附属坂戸高等学校かるた部の生徒の協力を得て、「競技かるたの進め方」の写真撮影や「札の覚え方」のイラストなどを作成した。なお、編集には椎名由美氏（埼玉むさしの会所属・３段）から全面的協力をいただいた。

【競技かるたハンドブック　目次】

1．競技かるたの進め方
　Ⅰ．「並べる」～「暗記する」
　Ⅱ．試合開始～試合終了
　Ⅲ．お手つき
2．基本的な構え方と札の取り方
3．札の覚え方
4．試合中のマナー
5．観戦中のマナー
6．競技かるた用語集
7．上の句索引
8．下の句索引
9．参考文献

（社）全日本かるた協会のwebページに同ハンドブックの pdf ファイル掲載されたところ、前者の画像が（社）全国学校図書館協議会発行「としょかん通信（中高生版）2010 年11月号」に掲載され、後者のイラストはダイヤモンド社編・発行の『暗記　百人一首』(2010年)に掲載されるなど、各方面から評価をいただいている。pdf ファイルの形で web ページに掲載すると、費

用もかからずたくさんの方にいつでも閲覧してもらうことが可能であるため、競技かるたの海外普及のためには効果的な方法である。

〔図１　『競技かるたハンドブック』より　競技かるたの進め方(p.2)〕

〔図２　『暗記　百人一首』表紙（２枚の語呂合わせイラストは本校かるた部生徒がデザインしたもの）〕

（３）小倉百人一首かるたを利用した国際交流プログラムの構築と実施

中国語版の翻訳にあたっては、２.（１）①の調査を実施した「第3回小倉百人一首かるた北京大会」に参加した３名の大学院生（北京第二外国語学院の郭攀霞、索莉虹、武?さん）に、「競技かるたスカラシップ（後述）」という形で翻訳をお願いし、効果的な国際交流プログラムを実施することができた。

また、２．（１）③の調査をお願いした「武蔵浦和日本語学院」でも「かるた体験講座」という形で本校かるた部生徒が日本語を学ぶ学院生（中国を中心とした若者たち）の前で模範試合を披露し、競技かるたのルールを説明、ミニゲーム体験などを教える機会を得た。その実際について次項に述べる。

今回の「競技かるたハンドブック」翻訳について、海外在住の競技かるた選手らの協力を得て中国語の他に英語とタイ語版の作成もおこなった。英語版は、北京大会で調査活動のコーディネートをお願いしたストーン氏に依頼し、中国語・タイ語版もまとめて同氏のwebページに掲載していただいた。

また、タイ語版については、バンコク在住の競技かるた選手の皆さんに協力をいただいた。中心になって編集作業を進めたのはイーブン美奈子氏（クルンテープかるた会・２段）であるが、日本留学時に競技かるた初段を獲得したAnan Pansomboon氏が翻訳を担当した。また、本校にも短期留学で来校したワタナー・ウィタヤー・アカデミーのかるたクラブの生徒さんたちが「タイ語版語呂合わせ」を考案してくれた。コラム「百人一首豆知識」など、新たな情報も追加されて魅力的な内容になっている。競技かるたを多くの人に知ってもらいたい、という選手らの思いが詰まったテキストが完成した。

３．交流の実際

（１）外国人学生の競技かるたスカラシップとかるた部員の交流

前述した「地域芸術振興プラン推進事業」（2009年）の一環として、北京で日本語を学習する大学生を招聘し、埼玉県かるた協会が主催する「埼玉県百人一首大会」への出場支援、選手らとの交流活動を実践した。２年目にあたる2010年も科研費を活用して「競技かるたハンドブック」の翻訳謝金を旅費・大会参加費に充てる形で３名の大学院生を招聘し、同大会へ参加、本校かるた部員との交流活動をおこなった。彼らの来日スケジュールは下記の通り。

【2010年の来日スケジュール】

9月22日　成田空港着、ホテル到着

9月23日　埼玉県大会出場（会場：戸田市スポーツセンター）、試合後に本校かるた部生徒が中国教職員に向けた「模範試合」についてアドバイスを受ける。

9月24日　都内観光（浅草、国会議事堂、皇居、六本木ヒルズ）

9月25日　本校かるた部生徒と一緒に川越観光（川越まつり会館ほか）、成田空港出発、帰国

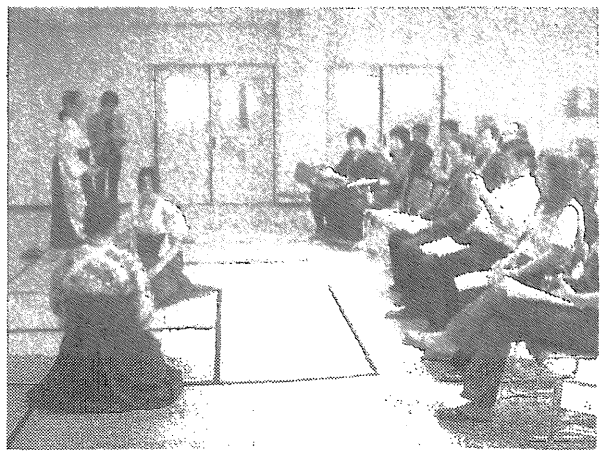
〔写真２　埼玉県大会（小学生との接戦を制した武さん。相手陣を抜いて札を送る。）〕

〔写真３　本校かるた部員と一緒に川越まつり会館にて（前列右から２人目が郭さん、左から２人目が武さん、後列右から２人目が索さん）〕

ちょうど本校は2010年10月14日に（財）ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）主催の国際教育交流事業として実施された中国教職員招聘プログラムの一環で中国の小・中・高教職員30名の訪問を受ける予定であったため、かるた部も模範試合と部活動紹介を披露することになり、上述の３名とかるた部員が協力しながらプレゼンテーションの準備をおこなった。

３名のなかで索さんがリーダーシップを取り、本校かるた部リーダーと中心になって「模範試合」の説明方法について相談した。「かるた」というゲームを知らない中国の先生方に、競技のルールを理解させることは難しいため、中国でお馴染みの「唐詩三百首」と比較しながら、和歌の「上の句・下の句」や競技かるたの「決まり字」(和歌のどこまで聞けば他の歌と判別できるかを示した文字）について紹介してはどうか、との提案があり、こうしたアドバイスに従ってパワーポイントを用いたプレゼンテーションをおこなった。既に帰国していた索さんたちには、Ｅメールを通じてプレゼンテーションソフトの翻訳を依頼した。

〔写真４　模範試合の様子〕



〔図１　紹介で用いたパワーポイントのスライド〕

唐詩三百首を例にすると　以《唐诗三百首》为例

登鶴鵲楼　王之渙

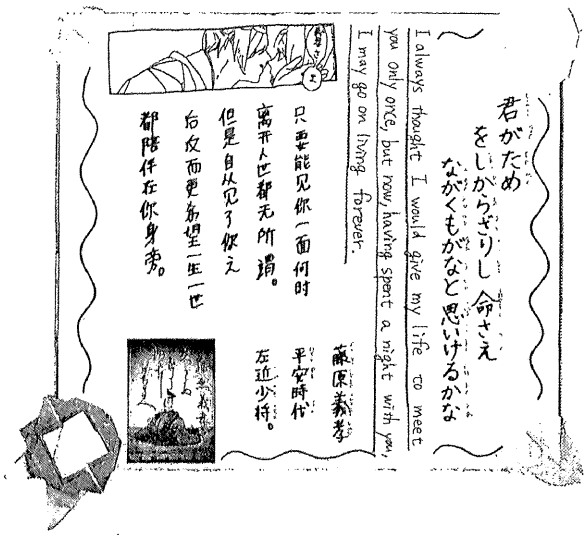
【上の句】に相当（この部分を詠む）
【上句】（唱读者唱读该部分）
白日依山尽，黄河入海流。

【下の句】に相当（この部分が書かれた札を取る）
【下句】（比赛选手抢夺写有该部分的牌）
欲窮千里目，更上一層楼。

発表の際は同時通訳の方が同席してくださったので、発表原稿を渡して中国語による同時説明をお願いした。そのため、発表を視察した中国教員の方々は内容を理解してもらえた方が多かったようだ。また、３名の院生が注力して翻訳してくれた「競技かるたハンドブック（中国語版）」も印刷・配布した。

さらに、国語科開設科目「ことばと文化」の受講者にも古典学習の一環として、「海外のお客様に見せる小倉

百人一首色紙をつくろう」というテーマでグループ学習をおこなった。３～４人１グループで好きな和歌を一首選び、色紙のなかに歌意や作者紹介、イラストなどを盛り込み、歌が伝えようとするメッセージを表現させた。英訳やイラストなどは下記参考資料を示し、中国語訳はスカラシップで来日した３名の大学院生に協力を仰いだ。これらの色紙も模範試合の会場に掲示し、「どの作品が歌のメッセージをよく伝えているか投票をお願いします」と添えて中国の先生方に見ていただいた。



【参考資料】

・杉田圭『超訳百人一首　うた恋い。』（メディアファクトリー2010　監修　渡部泰明）

・マックミラン・ピーター著　佐々田雅子訳『英訳詩・百人一首　香り立つやまとごころ』（集英社新書2009）

【写真５　小倉百人一首色紙を見つめる中国の先生方】

模範試合、ハンドブック、色紙を見てもらったコメントを以下に記す。（日本語翻訳は索攀霞）

【中国の先生方の感想】

・ハンドブックはよくできました。このような活動は文化性が含まれて、味わいに富んでると共に、娯楽性と競技性も高いです。（吉林大學附属中学校教員）

・特色があって、とてもよかったです。カルタについてもっと知りたいです。（北京師範大学付属実験中学教員）

・二人の選手は真面目で、細かいですが、その意味はよく理解できませんでした。（長春外国語学校教員）

・このような活動は生徒の芸術への感覚を増して、芸術教育と競技をよく合わせた教育パタンと言えよう。素晴らしかったと思います。（北京師範大学附属第三中学教員）

（２）武蔵浦和日本語学院での競技かるた紹介

調査活動に協力いただいた日本語学校からの依頼をいただき、同校の日本文化体験行事の一つとして、「かるた体験講座」を本校かるた部員とOGの11名が務めた。（１）で作成したプレゼンテーションソフトを利用し、模範試合や競技かるたのミニゲーム、坊主めくりなどを約100名の同校学生に体験してもらった。準備時間のない中で初めて実施したプログラムであったため、前項に述べた模範試合で活用した教材を流用する形となり、日本語初級の外国人学生に競技かるたを充分理解してもらうことに多少の困難はあったが、高校生が自分の所属する部活動で学んだ日本の伝統文化を、日本語を学ぶ外国人学生に伝える体験を通して様々な言語活動に取り組み、いくつかの学びと課題を見出すことができた。

概要については以下のとおりである。

【かるた体験講座の概要】

日時：2011年2月9日10:00～15:00（95分×２回）

会場：11人を２グループに分け、２教室で同時進行

プログラム：自己紹介（10分）

競技かるたについて（模範試合・パワーポイント利用、15分）

ミニゲーム体験（15分）

坊主めくり体験(15分)

休憩（10分）

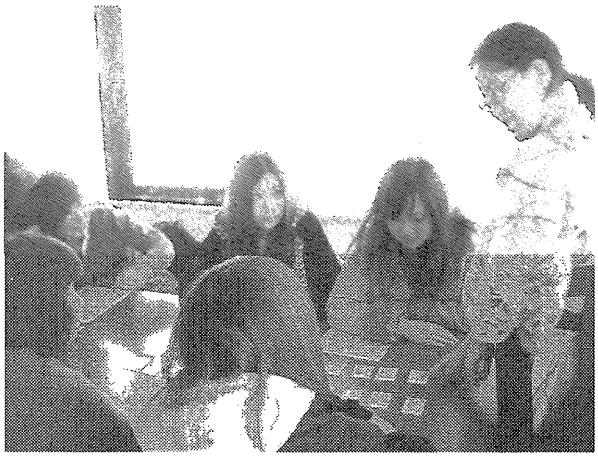
交流会（茶話会、30分）

準備：和装用品・スタイル畳（模範試合用）、ミニゲーム用かるた取り札（10枚１組、15組×２会場分）、坊主めくり用読み札（5組×２会場分）、配布プリント３種（①競技かるたのルール、②坊主めくりのルール、

③アンケート用紙）

【写真６　模範試合の様子】

【写真７　ミニゲームの様子（右は本校かるた部員）】



【写真８　坊主めくりの様子】

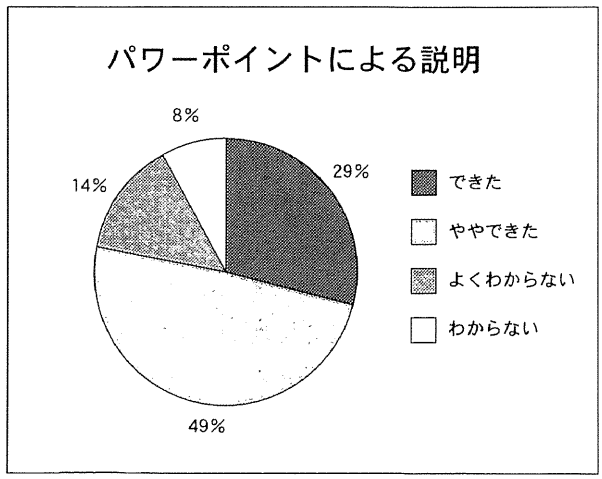
【写真９　さいごに全員で記念写真】

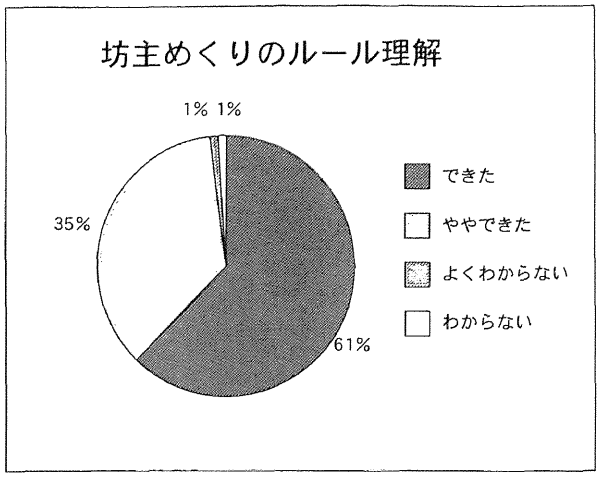
【武蔵浦和日本語学院生へのアンケート】

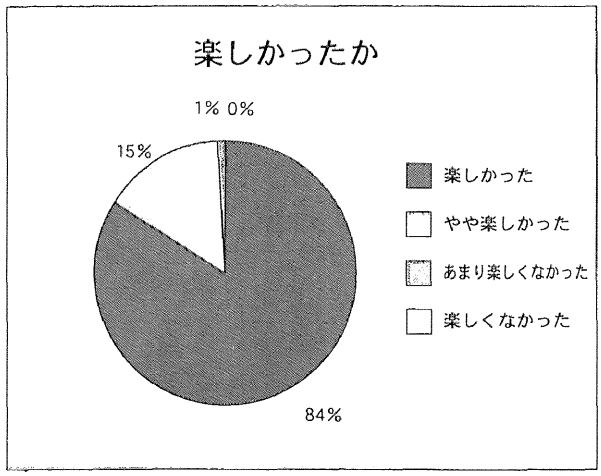
回収数98、男（56）、女(42)、平均年齢22.2、平均滞在期間17.5ヶ月、

出身：中国(84)、マレーシア(5)、香港(4)、モンゴル(1)、韓国(1)、バングラデシュ(1)、フィリピン(1)、未記入(1)

アンケートは交流会（茶話会）の時に記入をお願いした。、今回のプログラムに対する理解度を 12 項目に分けて質問してみた。理解度の低い項目は、「パワーポイントによる小倉百人一首の説明」「上の句・下の句の理解」「決まり字」などが挙げられた。一方、比較的理解度の高かった項目には「競技かるたの進め方」「坊主めくりのルール」などが挙がった。また、全体の84%の人たちがプログラムを「楽しかった」と回答してくれたことは我々の大きな自信につながった。







【本校かるた部員のふりかえり】

紹介行事が終わり、着替えや片付けなどが一段落してから控室でふりかえりをおこなった。以下はその際の記録である。準備の時間が少なかったこともあり、かるた部員たちの感想には混乱や反省の声があった。しかし、「次回はこうしたい」という建設的な意見もあり、来年度以降も「外国の人たちにもかるたを楽しんでもらう」という目標をもって継続させていく方向で締めくくられた。

〔パワーポイントの説明について〕

・パワーポイントのプリントアウトを忘れたために、スライドの切り替えタイミングが分からなくなってしまった。（リハーサル不足だった）

・配布したプリントは情報量が多くて、学院生の皆さんに短時間で理解してもらうのは難しいのでは？

・通訳付きで年齢層が高い中国人にはうまくいったが、日本語だけで若い世代へ説明するには難しかった

・ppt よりも大きくてわかりやすいボード（取り札拡大図)などで見せるとよかったかも。

〔ミニゲームについて〕

・上の句と下の句が別物だと思ってしまう人がいた。

・競技形式のミニゲームよりも「散らし取り」（4～5人で輪になって取る形）の方が楽かも。

・ミニゲームの説明では途中から「お手つき」について関係無しとする発言で場が混乱してしまった。

・先に坊主めくりで楽しんでから、模範試合という流れではどうか。（徐々に難易度をあげていく展開。まず読み札を見せて、上の句下の句の概念を理解させる。）

・学習者のレベルにあわせて用紙を配るか言葉で説明するか対応を変えていきたい。（午前のグループは日本語上級者が多く、午後のグループは日本語初級者が多かったようである。）

・初心者へミニゲームをさせる時、通常の「下の句→次の歌の上の句」の流れを止めて、「上の句→下の句」でシンプルに読んだ。（柔軟に対応するのがよい）

・ミニゲームには歴史的仮名遣いのものはできるだけ省いた方がいいかも（例・けふ）

【武蔵浦和日本語学院専任講師の方々によるコメント】

〔パワーポイントの説明について気づいた点〕

・ 外国人に対する説明の場合、まず「かるた」というカードゲームについて説明する必要があると思います。その上で以下2段階に分けて説明する必要があると感じました。

① 一般的な「かるた（犬棒かるたのような)」と「小倉百人一首かるた」の違い

② 「小倉百人一首かるたを使った一般的なかるたゲーム」と「競技かるた」の違い

・ 外国人（特に中国出身者）には「部活動」という概念を理解するのが難しいので、放課後や土曜日を使った活動や、試合への参加などの話を説明しても良いかと思います。

〔進行について気づいた点〕

・ 配布資料やかるたの札組の準備等、事前にしっかりしていただいたおかげで非常にスムーズに進行できました。

・「ミニゲーム」の進行は以下の点はもう少し改善したほうが良いかもしれません。

① 「決まり字」で取るのは難しいと思いますが、もしそこを体験させたいのであれば、ゲーム前にもう少し説明したほうが良い。

② ゲーム前に札を取ったらどこに置くかなどをしっかり説明したほうが良い。

③ 「お手つき」「相手陣地の札を取る」等のルール設定が難しかったようなので、細かいルールはなく

したほうが良いかもしれない。

〔全体を通して〕

高校生のみなさんがとてもしっかりしており、ただ日本人と交流するということだけではなく、自分たちよりも若い人たちが真剣に物事に取り組む姿勢なども学べたと思います。学生達にとって、とてもいい経験になったと思います。

4．考察と今後の課題

「小倉百人一首かるた」という教材を、日本語を学ぶ海外の若者へ紹介する活動を通して日本の若者が自国の伝統文化に対する理解を深め、伝え会う力を高めることを目指して様々な活動を展開してきた。日本語学習者の語学力やニーズも多様であり、交流活動の際はこれらのリサーチが重要で、プログラムの構築には交流する相互のニーズをコーディネートする工夫が求められ、その調整は簡単ではない。しかし、今回の交流活動を通して、本校かるた部員らは「自国の文化を外国人学生に紹介する」という場に立たされる貴重な体験ができた。「異なる文化的背景をもった人達とのコミュニケーション」という課題を背負い、よりユニバーサルな言語活動を模索する経験は、自らの言語感覚を磨く契機となり、国際理解を深め日本人としての自覚をもつ契機ともなり得た。これらの活動を継続させるなかで、今後は学習の場を部活動から国語教室へ移して実践していきたい。

※本研究は平成 22 年度科学研究費補助金（奨励研究 22908009）の助成を受けた。